

# All Saints' Dayを前に～変身願望と自己改革と

福 島 旭

11月1日はカトリック教会で「諸聖人の日」という祝日（日本キリスト教団では11月第一日曜日が「聖徒の日」）である。天国で神のもとにいる人々に思いをはせる記念日で、「万聖節」とも呼ばれ、「お盆」の風習に類似している。英語で“All Saints' Day”と表記されるこの日の知名度は低い。ところがそれとは対照的にその前日、10月31日は今やクリスマスに追いつく勢いで祝われるようになった。その有名な日とは“All Hallows' Eve”、つまりその短縮略語の「ハロウィン」だ。“Hallow”は“Saint”の古語形で「聖人」を意味する。「ハロウィン」の語意は「諸聖人の日の前夜」ということになる。だが、「ハロウィン」キリスト教の暦にはなく、その起源はケルト民族のドルイド教に遡るとされている。

なぜ、「ハロウィン」が前夜祭としてのみならず、何週間もの間、派手に祝われるようになったのか。もちろん営利目的な商品販売の宣伝効果があるには違いない。しかし他にも、特に若い世代のこころを動かした起因があるのではないだろうか。有名なテーマパークでは、約20年前から秋の恒例行事として「ハッピー・ハロウィン」が開催され、最近では「ハロウィン・ホラー・ナイト」と銘打って集客する施設もある。そして、そこに共通しているのは集団での仮装体験である。興味深いのは、「楽しい」仮装と「怖い」仮装が共存していることだ。

もともとの「ハロウィン」は亡くなった人々が地上にやってくる日に、その中に混ざっている悪霊を寄せ付けないための魔除けの習慣であった。ところが、いつの間にか、その悪霊自身に変身したり、魔除けのカボチャを身に付けたりして、みんなで堂々と仮装して、日常の自分から一時的に脱皮する目的を達成して楽しむ日になっている。

堅苦しい言い方だが、死者や悪魔に仮装する非日常的な体験を通して得られる思いの中に、私は素朴な宗教性を見い出している。生と死、日常と非日常といった境界を越えて自分を見つめ、また死者への思い抱く体験はとても大切である。それは元々の宗教の果たすべき役割の一つでもあったはずだ。私自身、高校生の時の文化祭で、クラスの仲間と共に現代には存在しない武士の格好で町を歩いた仮装行列の体験は、思い出以上の何かになっている。

ちなみにこの10月31日は「宗教改革記念日」でもある。「ハロウィン」がその由来に関係のない形式的な行事となってしまうのではなく、自己や日常を見つめ直し、問いかけ、改革する契機としてのこれからの新しい風習に変わっていくことを密かに仮想している。

（中学部宗教主事）